

認知症ケア～愛を込めた介護でここまで変わる～

神奈川県横浜市

介護付有料老人ホームニチイホーム菊名

職員 渡邊 雅賛

1 はじめに

私たちニチイホームは、東京・神奈川・埼玉・千葉・静岡を拠点に50施設以上展開している介護付有料老人ホームです。楽しい、嬉しい、良かった…とただ純粹に皆様の笑顔を生み出し、その笑顔からはじまるみんなの笑顔の連鎖、ホームでの暮らしが満たされたものとなるべく、お客様お一人おひとりの思いを受け止め、応えることで私たちはお客様の笑顔と幸せの実現を目指しています。当ホームでも『アットホームな環境の提供、生き活きとした生活の支援』の下に地域に開かれた、活気あるホーム作りを実施しています。

2 事例の紹介

脳梗塞の発症による認知症の併発、それらからなる自発性の低下、集中力の欠如により日常生活が困難な状態であったため、当ホーム入居となった。意識レベルでの低下が顕著にあり、残存機能が活かされておらず、自立した生活が送られていない事が問題としてある。関わっていく中で、職員間で共通のテーマを掲げ、職員、お客様とが共に歩幅を合わせる事を大前提とした。また、専門性を高め、より質の高い介護サービスを提供すべく、他職種連携を成功させる事が出来、お客様が少しでも笑顔に溢れた、自分らしい生活を送る事が可能となった事例です。

【日常生活を困難にしている点】

- 1、認知症の進行により、自発性が著しく低下し、また脳梗塞の発症による集中力の低下
- 2、残存能力に沿ったケアが実施されておらず、下肢筋力の低下が見られる。
- 3、発語不足、他者との関わりのおなによる認知症進行の危惧。
- 4、日々の生活にメリハリがなく、活気が見られない。

【仮説①】職員による歩行訓練の実施、また日常生活において、自立を促す介助方法を共有することを継続することにより、ご本人の活動性を高め、下肢筋力の向上になると考える。

【具体的なプロセス】

○職員間での統一した言葉かけ

介助に入る際は、ご本人の理解と、意識付けをすべく、職員間で介助に入る際は統一した言葉かけを実施した。一つ一つの言葉かけに対し、必ずご本人から何かしらの反応があった上で介助を行なうことを大前提とし、介助時はこのようにご本人が動作することを事細かに、そして丁寧に説明していった。

○立位機会の増設、職員による歩行訓練の実施

訪問マッサージの担当医と連携を計り、職員による歩行訓練を実施した。日々担当者を割り振り、実施内容は専用のシートに記入した。記入内容、ご本人の日々変化するADLを踏まえ、定期的に担当医と話し合いを実施し、柔軟に訓練内容を更新していった。

立位という動作に対する意識や理解があるため立位動作がスムーズに行なうことが可能となった。また言葉かけに対して、ご本人から「立ちます」といった発言も出てこられ、介助なしで立位していただくことも可能となった。

また、短距離での手引き歩行が可能となったため、外出レクリエーションでの活動の幅が広がった。

【仮説2】摂取時にプラスチックスプーンと白湯茶碗といったご本人にとって負担の軽い食器の使用を継続することにより、ご本人の自力摂取に繋がるのではないかと考える。

【具体的なプロセス】

○日光浴の実施

午前中、基本的に臥床対応であるが、覚醒促しのため、離床時、共用フロアに誘導した際は一度、窓際に誘導し、数分間日光浴を実施した。

○毎食前にアイスクャンディーの提供、ご本人に沿った食事環境の整備

歯科往診と連携を図り、嚥下機能の促し、刺激物による口内活性化のため、毎食前に手製のアイスクャンディーをお渡しし、召し上がって頂いた。ご本人の負担軽減、食事に集中して頂くことを目的に、軽い食器（プラスチックスプーン）を使用した。また、白湯茶碗に、主食、副食を小分けすることを実施した。

元々、午前中の傾眠状態が多く見られていたのだが、午前中の臥床対応に付随し、日光浴の実施により覚醒時間が格段に増えた。また、毎食前のアイスクャンディーの実施で、嚥下機能が活性化され、摂取動作に良い影響が及ぶ事となった。

食器の変更により、集中力の持続時間が増えたことに比例し、食遊びの時間が減った。食事を提供した際は、まず自らがスプーンを運ぶ様子が毎食伺えてきた。こうして、ご本人に沿った摂取環境を整えたことで、全体的な摂取量自体は減ったが、自力摂取量は格段に増えたのは間違いない。

【仮説③】アクティビティケアの観点から、ご本人の発語を引き出す言葉かけを職員が徹底する事を継続することにより、自立した自分らしい生活を送る事が出来ると考える。

【具体的なプロセス】

○ケアマネージャー、ご家族からの聞き取り調査

○生活リズムの把握によるケアの見直し

現在の当ホームでの生活リズムを【ご本人側】【介護者側】の視点から時系列で表にまとめた。

○レクリエーションに着目し、ご本人が関心のあるもの、興味のあるものを探る

多種多様にレクリエーションを実施し、それらに対する反応を記入し、整理し、ご本人の意欲

を引き出すレクリエーションを探った。基本的に午後のレクリエーション時の声かけ、実施中の反応専用シートに必ず記入した。

聞き取り調査により脳梗塞発症前の生活歴、病歴の確認ができ、ご本人の意欲を引き出すレクリエーション実施（音楽療法、音楽レク）、外部機関（訪問マッサージ、外部研修）との連携に結びつけることが出来た。また24時間行動チェック表により、傾眠時間の多さ、いわゆる覚醒時間の少なさ、またご本人の発語のなさに着目することができ、覚醒時間、発語を増やすためのアプローチに重きが置かれることとなった。

お天気メーターは区分基準が曖昧であったため中止とし、【〇〇様反応パターン表】と題し、区分することなくありのまま反応を記入することに変更された。集計し、整理する中で、指相撲がとても反応が良く、覚醒を促すツールとして使用され、中でも歩行訓練前の準備運動、食事前に実施されるようになった。

3 考察

ホーム全体としても事例を通し、言葉かけの重要性と認知症の有効性を見出せたことは今回の事例研究がとても意味のあるものであったと考えた。言葉かけは介助にとって、言葉かけから始まり、言葉かけで終わるといった根本的な部分である。今回は発語に着目した言葉かけであったが、これは理解を促すことで自立に繋がり、自分らしい生活を送って頂くことに結びつく。『されてる』よりも『している』という認識を各々お客様が持つことが大切であると考えた。言葉かけを重要なツールとして捉え、これからもホーム全体で質のある言葉かけを実施し、全体の自立性を向上させていきたい。

認知症ケアにおいても、アプローチ方法が多種多様に存在する分、日常生活でも容易に組み込めるケアはたくさんあった。あまり構え過ぎることなく、少しの付加価値をつけることで認知症ケアとして十分に機能することがわかった。職員間でも有効性に関心を抱いたことで、ラジオ体操、嚙下体操、介護予防体操といった日々の流れをより良いものにするべく、認知症ケアの意味合いを加えていくことで、ホーム全体のケアの質を向上していきたいと考えた。

こうして事例研究を実施していった中で実質的な数値以上に目に見えてご本人の反応が増え、ADLが高まるといった変化が出てきたことは個人的に大変嬉しく思った。また、このような関係性を通し、他職員に対しても愛を持って正面から向き合うことがいかに大切であるということ浸透させたことが評価出来ると考えた。だが、これに満足することなく日々変化していくご本人の状況に合わせて多方面で連携を取り、最善を尽くすことで、更に自分らしい生活を送って頂くことは可能と考えた。

4 おわりに

振り返れば、始めは反応が乏しい、無表情と記載してきたが、ご家族とは入居当初から笑顔でお話されている部分は伺えた。現時点においてADLの向上やホームでの生活に慣れてきた部分もあるだろうが、根本的な部分でご本人との信頼関係がしっかり構築出来たことでご本人からの発語や笑顔がたくさん生まれたのだと考えた。適切なケアを実施するために、まずはお客様をし

っかり知ることから始まる。その上で、他職種、他機関との連携で専門性を高めていくことが介護現場において求められている部分であると考えた。

認知症の〇〇さん…

発語なく、何に対しても反応がない〇〇さん…

と一つに形付けてしまったり、捉えてしまうのではなく

一人の人間として、正面から向き合うことが重要であった。

誰にも生まれながらにして、自分らしく生きる権利を持つ。自分らしい生活、自己実現といった目的に対し、ホーム全体が一緒となり、歩幅を合わせて、共に歩いていくことが、その方の自己実現、先にあるその方の幸せに繋がると考えた。

『愛を込めた介護でここまで変わる』

これからも愛を込めて、お客様と正面から向き合い、良い介護を提供すべくホーム全体で精進していきたい。